



指揮棒の海うねらしむ灯の朧
下萌や鳥を宿してゐる深空
雪形や笑ふばかりのおばあさん
壺焼の沸^{たぎ}りて腹の据わりけり
囀や余白に風を描くつもり
滝凍てて水の骸となりけり
春の林檎は縄文のかたちかな
田芹摘む水音石牟礼道子の忌
木の根明く水はどどつと四方の田へ
鰯食ぶ夜風のすさむ遠淡海
がん告知吾拐かす螢鳥賊
人は壁作りたがるや鳥帰る
叫びても容れられぬ子や枯木星
斑雪柩に入れし琥珀玉

*

鋤焼を食うて万引家族かな

満田光生
川村五子
田中純子
塚原白里
滝澤あや
田中優子
田村道子
宮岡光子
清水美智子
坂田寿美
青山篤司
古畑富美江
竹岡みち子
渥美人和子
樋上照男

流水を見て月の道帰りけり
あまりよく知らない人を愛す秋
百千鳥黄泉へ埴輪の炊飯具
啓蟄や細胞もんどももんぞ
裸木をあたためている雀どち
行く春や花の名たんと知りし人
新興俳句うすらひの刺さりゐる
よもぎ餅明日はシャガール見に行かん
ネクタイを引き抜く音や二月尽
春立つや太き十指の薬鍾馗
春や春耳たぶ揉んで引つ張つて
ふくろふの薄目この国救へるか
夢生まぬ電気毛布をたたみけり
*

許勢元貞
高橋佳世子
中澤良子
依田ひろ
柿谷有史
佐藤光子
島田葉月
村田朋美
森田玉子
榎木幸子
野口美智子
窪田英治
小松まさ子
市川静子
宇内久子

岳・見えたるひかり 五月

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。この一冊にときどきの十年間の感じ方や思いを集大成し、『俳句必携』とした。古今の一〇〇〇句を楽しむが副題。平凡社のペテランの編集者三沢秀次氏のお力添えによる。生み落したのは私であるが、育ててくださったのは、編集者のような気がする。本とはこういうものかという感慨が深い。俳句も世に知られるのは、作者もさることながら、発表媒体の、当面俳誌の編集者の力が大きい。

鳥を宿してゐる深空 — 見えないものを見る

下 萌 や 鳥 を 宿 し て ゐ る 深 空 川 村 五 子

下萌は地中とのかわり。深空はその奥の宙とのかわり。鳥はその間を繋ぐ使者。鳴いている鳥も鳴かない鳥もすべて包含して深空を想うときに「宿す」の語がよく働いている。五子さんの普段の自然を捉えんとする「吟行力」の成果か。

雪 形 や 笑 ふ ば か り の お ば あ さ ん 田 中 純 子

雪形とおばあさんとのぎりぎりの照応がいい（わからない人のためにことばを補うと、消えなんとする瀬戸際の）。やさしい。明るい。春は「笑ふばかり」の季節。雪形もおばあ

た形。曖昧さを持った春の林檎から縄文を連想した着想のゆたかさに舌を巻いた。

田 芹 摘 む 水 音 石 牟 礼 道 子 の 忌 宮 岡 光 子

石牟礼道子は二〇一八年二月十日逝去。一九六〇〜七〇年代の体を張った水俣病告発への住民運動となった闘争と、書かれた苦海浄土三部作の執念のげしき。激烈な生前を死後、「田芹摘む」素朴な「水音」で回想した。石牟礼道子への共感が愛に満ち、すがすがしい。

木 の 根 明 く 水 は ど ど つ と 四 方 の 田 へ 清 水 美 智 子

今月の秀句

指揮棒の海うねらしむ灯の朧 満田 光生

オーケストラの指揮者の指揮たけなわ。最高潮の場面を「海うねらしむ」と捉えた。大きく音響の海にうねりをつくる。盛り上げ、抑えて、絶頂の演出に全楽器が最高の音をとどろかす。音の中に演奏家の全身がぶち込まれる。オーケストラの参加者ひとりひとりの個の主張が一大ハーモニーの微粒子となって盛り上げる。春の夜の灯も大事な伴奏者のようだ。朧がいい。柔和そのもの。音楽に堪能な光生さんの佳句。

さんもニコニコ。双方とも束の間と思えば、いっそう思いが深い。

壺 焼 の 沸 り て 腹 の 据 わ り け り 塚 原 白 里

食べようかどうしようかの思案ではない。七輪の炭火で焼かれ沸騰するさざえの壺焼を見て、生きることの腹が据わった。なにか懸案事項があったのである。ペテランの技や巧い。

囀 や 余 白 に 風 を 描 く つ も り 滝 澤 あ や

主人公は画家。どんな形か、色か。最高の気分を詠う。

滝 凍 て て 水 の 骸 と な り に け り 田 中 優 子

凍りついた滝を「水の骸」とは、なるほど。普段の見方に死生観がしっかり感じられ、感心した。若い作者の感受性に思考の裏打ちがある。水のかなしみ。

春 の 林 檎 は 縄 文 の か た ち か な 田 村 道 子

直観でいいと判断した。が、このわかり方の鑑賞はむずかしい。晩秋、穫ったばかりのつやつやの林檎ではない。一冬経て、やすらぎの丸み、いく分鈍い色合い、内に弾みを秘め

亜高山帯の雪どけの水が四方の田へゆきわたるまでの時間と空間とのスケールの大きな把握に感心した。大景越後詠。

鰯 食 ふ 夜 風 の す さ む 遠 淡 海 坂 田 寿 美

遠淡海は浜名湖。湖畔の宿で春の魚、下あごの長い鰯を食べる。夜風が湖面を吹きわたり、遠州荒れの一夜。どこか胃の腑に、まだ鰯の下あごがごそごそしているか。旅愁一入。

が ん 告 知 吾 拐 か す 螢 鳥 賊 青 山 篤 司

句切れが気になるが、上五音で切るか。告知され平常心を失い沈んだ気分るときに螢鳥賊のあやしい光に拐かされた。がんを伴にというつらい日常を生きるスケッチに螢鳥賊が巧みに生かされ、感心した。

人 は 壁 作 り た が る や 鳥 帰 る 古 畑 富 美 江

ベルリンの壁でなく人と人とのつき合いの中での「壁」。人間不信のもの壁を作らない鳥との対比が鋭い。

叫 び て も 容 れ ら れ ぬ 子 や 枯 木 星 竹 岡 み ち 子

幼子虐待の社会的な話題をさりげなくまとめ、この世のつれなさを「枯木星」で象徴した。科学者らしいスケールの大きさと鋭さを日常詠に発揮できる作者として注目している。

斑 雪 柩 に 入 れ し 琥 珀 玉 渥 美 人 和 子

拓くことば ⑤② 自句寸言③⑥「洪沢孝輔さん」

山茱萸の黄に紛れんと風を見に 平成十年

「岳」（平成十年三月号）所載。「悼 洪沢孝輔さん」と前書。東信の真田町出身の詩人洪沢孝輔さんに呼ばれて平成元年、馬籠で開かれた「歷程」春の学校で講演をした。洪沢さんの他、栗津則雄など尊敬している文人の前で話すことは恐ろしかったが、五十歳になったばかりで、若氣云々の我武者羅気分。当日即吟「星空にとりのこされて春の山羊」を詠んでいるので、ひとりよがりな話をしたものと思う。洪沢さんとは昭和六十一年頃から親しく、詩集や評論集を貰い、亡くなるまで兄事した。「岳」の特集号に頂戴した「峠」に関する象徴詩は傑作。最期の病床からのことば「真に依るべきは〈虚空〉のみ。虚空における自他の合一。魚水にある如く、人虚空にあり」には感動した。私には春の魁、山茱萸のような人との印象が強い。いつも心に棲んでいる。句集『山の牧』所収。

梅雨穂草翼もつもの集ひたる 平成十年

「岳」（同年七月号）所載。「五月三十一日「岳」二十周年記念大会自祝」とある。金子兜太さんの記念講演が松本市のホテルブエナビスタであった。特集号には鬼房探訪記が載る。上野洋三先生とも仲がいい頃で、編集長

の第二句集『北斗七星』の特集が出る。みんな翼を持ち、羽ばたき始めていた。結束が固い。『山の牧』所収。

風曜日アイスクリーム主餐とし 平成十年

「岳」（同年八月号）所載。「イルフ童画館」と前書。岡谷の武井武雄美術館詠。「岳」表紙絵を書いてくださる二木六徳氏が館長。描かれている主人公はアイスクリームを主食に食べているような軽い体。口から出ることは今日は風曜日だという。えっ、そんな日があったの？心が洗われる。浮力がついた一日だ。『山の牧』所収。

良寛の手毬は芯に恋の反故 平成十年

「岳」（同年十二月号）所載。「新潟九句」から。出雲崎へはしばしば行く。十一月、杉浦範昌氏の「岳」への献身的な貢献「いい町を見よう」のバス旅行であったから子との手毬つきに貞心尼との交情を重ねての幻想から生まれた。しばしば揮毫する作。『山の牧』所収。

ラ・フランス固し戦没画学徒よ 平成十年

「岳」（同年十二月号）所載。「無言館ふたたび」と前書。塩田平にある無言館は忘れたくない昭和の遺産。中でも日高安典が戦地への出征ぎりぎりまで描き続けた未完の裸婦画。生きて帰り完成させるとの必死の願いもむなしく、フィリップンで戦死。二十七歳。絵の前に立ち、ラ・フランスの緑の固い肌が浮かぶ。『山の牧』所収。

愛用の琥珀玉（樹脂の化石）を柩に入れる。春浅い斑雪の日。選びに選んだ一語一語に亡き人への哀悼が滲み佳句。

流水を見て月の道帰りけり 許勢 元貞

オホーツク海沿岸の流水を見て月夜の道を家に戻る。たゞそれだけであるが、たっぷりとしたかな一句を読みたったような満足感がある。流水（春）と月の道という秋の風情とが出会い、そうか春の一句なんだとイメージを秋から春へトランスボリューション 移調する表現の技に堪能するのもかも知れない。

あまりよく知らない人を愛す秋 高橋佳世子

夫婦であろう。ふしぎをあたりまえに抱えて、そういうものだと思い込んで一生了る。曖昧さがあって長続きするのかな。

百千鳥黄泉へ埴輪の炊飯具 中澤 良子

炊飯具にまで着眼した点が秀逸。他界でもお腹がすかないようにとの心遣い。さすがに豊葦原瑞穂国の埴輪ですね。

啓蟄や細胞もんぞももんぞ 依田 ひろ

蟄虫がもももんど地上へ這い出す。地虫出づる候。そのように想像しただけで、体中の細胞が地虫以上にもももどずするという。感度のいい人である。

裸木をあたためている雀どち 柿谷 有史

裸木に雀が止まっている光景を「あたためている」と有史さんの心眼で見た気持の広さ、温かさに共感する。視覚のご不自由なことでかえって心が自在。情愛が深い。

行く春や花の名たと知りし人 佐藤 光子

立川朝日カルチャー俳句教室の近藤寿子さんが二月十一日逝去。七十九歳。友人の追悼句。やさしく秘めた華やぎを「花の名たと知りし人」と形容した鄙びたことばが巧み。上々。

新興俳句うすらひの刺さりゐる 島田 葉月

高屋窓秋の〈頭の中で白い夏野になつてゐる〉などモダンズム俳句には薄氷が剣のように刺さったイメージがあろう。

よもぎ餅明日はシャガール見に行かん 村田 朋美

草餅とシャガールへの関心。伝統とモダンズムの構合。近代という雑種性。現代の俳句の大方の特徴であろう。

ネクタイを引き抜く音や二月尽 森田 玉子

見逃しがちな「引き抜く音」によく気付いたもの。

春たつや太き十指の藁鍾馗 柁木 幸子

新潟と福島県境の阿賀町の春祭。藁人形の鍾馗に、自分の身の悪い所を身代りにしてもらう。佳句。

春や春耳たぶ揉んで引つ張つて 野口美智子
さあ元氣を出そう。冬眠から覚めて。只事のおもしろさ。
ふくるふの薄目この国救へるか 窪田 英治
「この国救へるか」といいたいほど平成末の世の中、民度
が下落。とくに政治は最低。ふくろうに馬鹿にされるばかり。
夢生まぬ電気毛布をたたみけり 小松まさ子
春を迎え、電気毛布を仕舞ったもの。「夢生まぬ」の言い
草がいい。おちやめな人柄が彷彿とする。
岳集推薦候補作を掲げる。

今月の秀句

鋤焼を食うて万引家族かな 樋上 照男
日本アカデミー賞最優秀作品賞他いくつかの賞に選ば
れた映画を思い描く。「万引家族」という意味するイメ
ージの意外性が一句中の鋤焼の庶民性と合わせること
で、猥雑な現代を端的に感じさせる。堪能する。卓袱台
を囲む鋤焼のごちやごちや加減ともかく、生きぬくに
は万引なんのその、わあっとまとまる一家。掲句はすっ
きりしたスタイルのいい句であるが、内味は大阪育ちの
作者のように、迫力を秘めている。

春深しぞろりと黒き麒麟の舌 浅田美代子
啓蟄や夜叉ひよつとこの顔体操 嶋津 孝子
海原は永久の枢よ鳥帰る 西海千賀子
発つ鳥に空より広き春の宙 西村 美枝
花冷や夫の忌巡る半世紀 杉田小百合
獨股山の合掌の形入彼岸 河合 照子
潦へ石炭殻や鳥帰る 小野 文雄
木の根開く首に巻くもの取るように 宮澤 和子
寒晴や大きな空に吾を晒す 飯田 都子

青雲集 ― 初投句ぞくぞく

音高く樹液吸い上げ木の根明く 市川 静子
北海道河西郡より初参加。知る人ぞ知るベテラン。小誌を
慕ってくださりうれしい。さすがに北海道の春待つ大樹の勢
いが朗々と詠われ一読破顔一笑。作者また根明きのような人。
限りなき雪原となる滑走路 宇内 久子
滑走路が雪原と化した。「限りなき」の形容が北国。青森
空港であろうか。地貌の実感を掬い上げることの大切さ。
青雲集候補作に次の二句がある。
タタールの馬の嘶き霾ぐもり 安藤 潤子
大晦日子らを集めて死に支度 小熊 旭